

組合士

アラカルト

中央資源リサイクル事業協同組合 事務局長

伊藤 順康さん
いとう よしやす

再就職後も活躍するシニア組合士

悠々自適もいけれど…

毎日が日曜日。しばしばリタイア後の悠々自適の生活はこう表現されるが、「実際には何もしないのも落ち着かないものです。自分の時間も大切にしながらも、やはり仕事ができるのが一番です」。こう語るのは、中央資源リサイクル事業協同組合事務局長の伊藤順康さんである。伊藤さんは約30年間勤めた東京鋳螺協同組合専務理事を定年退職後、現組合に再就職し、その管理運営に当たっているシニア組合士である。シニア組合士として再奉職するきっかけは、東京中央会からの紹介だった。前組合での定年退職を控え、務めていた東京都組合士協会役員についても退任を同中央会に打診した折、「組合士は個人資格。定年後も、協会役員はもちろん、組合士としても活動を続けてほしい」と慰留され、その約半年後には現組合が事務局長を求めているとマッチングの声がかかったのだ。いささか悠々自適の時間をもてあまし気味だった伊藤さんは「渡りに船」とこのマッチングに応じ、現在に至っている。

前職は組合員約200社の卸売り業者の組合、現職の組合は組合員約10社でリサイクル事業者の集まり。事務局の仕事内容も、前者は教育研修や福利厚生などいわゆる組合事業の運営管理や組合員の相談業務などがメインだったが、現組合は官公需適格組合として中央区役所から業務委託を受けて区内全域のびん、缶、古紙等の再生資源の回収と中間処理が中心。組合の性格は180度異なるが、「事務局としての仕事の本質は変わらない」と、着実に組合の運営管理に当たっているのもベテラン組合士ならではの。

実地に即した知識習得のために組合士に

伊藤さんが組合士の資格を取得することになったきっかけもユニークである。もともとは上野でメッキ工場を営んでいた伊藤さんだが、公害規制強化やメッキ加工自体の海外流出等、時代の流れの中で事業を整理、昭和50年に「ゆくゆくは事務局長に」という前提で前組合に入職した。ところが、事情により入職後わずか2カ月で事務局長就任となった。「右も左もわからない新米事務局長が組

合員200からの組合事業を維持していくことの不安はとても大きかった」という伊藤さん、何かと相談したり指導を受けたりと東京中央会と接触する機会も必然的に多くなり、その中で「事務局担当者に直接役立つ組合士」の資格と、その取得のための講習会の存在を教えられた。伊藤さんは、さっそく組合役員に諮って同意を得て受講、「実地に即した多くの知識を習得」するとともに、組合士の資格も得たのである。

組合士になつてみると、各種研修会や見学会に参加する機会も増え、「おかげで日々の仕事で起こる多くの問題や課題に対するヒントや解決策を即時に導き出すことのできる数多くの『引き出し』を持つことができた」こと、「多業種組合の組合士仲間と知り合え、運営、管理、事業内容など多種多様な情報や視点をえることができ、それが組合運営の一端を担う者として現在も大いに役立っている」ことなどを実感しているという。

組合士活用の一策と二つ

「組合士が一人でもいると、やはり組



合の運営や管理が違ってくる」と伊藤さんは自らの経験や同輩、後輩の活躍を通じて指摘する。実際、そういう「組合専門知識を持つ人材を求めている」組合は少なくない。一方、伊藤さんのように「働き甲斐がなにより優先する」というリタイア組合士も多数存在する。そんな状況を踏まえて、「今までに培われた知識と経験が必要とし、その能力を十分に発揮、活用できる職場が必ずある」。伊藤さんは東京中央会が実施し東京組合士協会が協力している無料職業紹介事業等を活用して、リタイア組合士の再チャレンジを促したいと言う。同時に、事務局職員採用を検討している組合役員の方々にも「長い経験と実績を持つ組合士を採用基準の大きな柱の一つと考えて積極的に活用してほしい」と願っている。それだけに「マッチングは中央会とともに組合士協会の責任と課題である」と捉え、今後その機能の充実を図っていきたい」と、自らシニア組合士として、また、組合士協会役員として、その活用を目指している。